

原宿幼稚園

東京都渋谷区

設計 アンリ・ゲイダン+金子文子/シエル・ルージュ・クレアシオン

E.C. 中野コーポレーション

COLE MATERNELLE HARAJUKU

architects: HENRI GUEYDAN+FUMIKO KANEKO/CIEL ROUGE CREATION

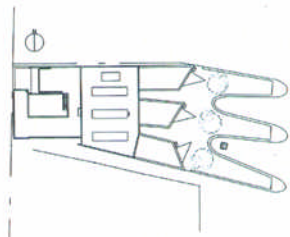


鳥瞰より俯瞰。

右頁：コートヤード。右手階段は牧師会館のエンタラシオン。



鳥瞰エンタラシオンファサード。



配置 縮尺1/800

建築要素のオブジェ化

建築における従来の基本要素を「限りなく自由」に発想することからこの幼稚園プロジェクトは始まった。人生で最初の集団生活を開始する子供たちのための「空間-エスパス」。そのような幼児期の無垢な、時に奇想天外な彼らの発想にふさわしいフリーな空間。そこから表出する光景は、あらゆる角度・視覚・方向に発散され、拡散される閉鎖性のないものでありたい。方向性の定義されない空間が生み出す永遠性の示唆。

具体的にはひとつひとつがはっきりと個性をもつ「フォルム=オブジェ」を形成した。すべての建築的解釈は、ここで従来の定義を消失される。バラバラに分析され再構築され、新しい任務が与えられる。たとえば多目的ホール「天井=壁=柱」は、それぞれ本来の建築的定義より自由な連結をした1要素としてとらえる。それはまず光の帯として分析された天井である。高い天窗の自然採光を吸収すると同時に、壁、柱と一体化し、屈折しながら床に交わり、小さなベンチで終了する。「天井=壁=柱」はこうして1要素として連結され、その「意図的フォルム=オブジェ化」を完了する。

それは、まるで玩具箱から子供たちによって取り出されたレゴブロックのようだ。ひとつひとつフォルムが確認され、吟味され、再構築される。建築全体の構成も意図的にオブジェ化された大きな3つのマスの組合せとした。幼稚園のシンボルマークの魚とギリシャ文字を刻んだ天空に高くのびる象徴的正面ファサード、中庭をはさんで事務所、厨房、2階牧師館などの機能部を集結した「フォルム=オブジェ」化の第1要素。第2番目の要素は多目的ホールの吹抜け空間のボリューム。第3が外壁ごと多目的ホールに嵌め込まれたク

ラスルームの3つのボリュームである。「フォルム=オブジェ」+「フォルム=オブジェ」による意図的アセンブラージュ。言葉を変えれば「オブジェ=フォルム」間の意図的邂逅。その邂逅の図式によって表出してくる意図されない錯綜する光景の面白さ。独自性を主張するさまざまなムーブメントで連結され構築されたひとつひとつの「オブジェ=フォルム」。その再構築には鮮明な個性をアピールする色彩をもたせる。その間に重要な媒体としての「光-ルーミエール」。

以上の建築的仕掛けによって創出された空間-エスパスには、さまざまな光景=驚きが発見されている。毎日、否、一瞬、一瞬が子供たち自身による新たな風景の発見につながるだろう。それはまた彼らそれぞれの発達に適切した知的好奇心の度合いによつ

ては多彩な表情で見えてくる光景。「オブジェ=フォルム」の邂逅がつくる開かれた空間のねらいだ。

3つのクラスは、それぞれが独立した小さな家と見た。その目前に広がる3つの大胆な形態のクラスガーデンを、自然の入り江のような表情で見せてくれる洗い出しの景観=水の庭、石の庭、そしてそれにつづく緑の芝の庭。正面ファサードから3つのマスで連結されてきた建築要素は、外へと連続するこのやわらかな浜辺の風景を意図した庭によってその建築の流れを完結する。大きくうねっていくスロープの上をなぎさの小さな生き物のように軽々と浮遊していく子供たちの情景。建築の風景をもっともゆたかに肉体の喜びの中に見出す彼らの存在によって、私たちが目指した方向性の定義されない空間が示唆する永遠性は、はじめてその本質を見せてくれるだろう。

(金子文子+アンリ・ゲイダン)

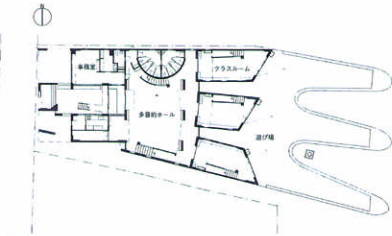
Rを指く階段と半円形のマスのを見る。



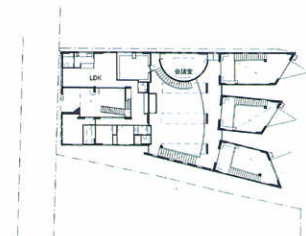
メゾネット構成のクラスルーム。



設計 建築 アンリ・ゲイダン+金子文子/シエル・ルージュ・クレアシオン
構造 造研設計
設備 設備デザイン
施工 中野コーポレーション
敷地面積 685.11㎡
建築面積 437.99㎡
延床面積 655.57㎡
階数 地上2階
構造 鉄筋コンクリート造
工期 1997年12月~1998年7月



1階平面 縮尺1/500



2階平面